

## 週日の説教

金 大烈 神父 2010年1月20日(水)

### 《自分の背中・自分の“はかり”は?》

おはようございます。皆様、お元気ですか。

ある政治家がいました。その方は色々な人々に尊敬されている人でした。彼に出会った人は、その謙遜な態度や人格の深さに感銘を受けたそうです。その評判が広まって、政治的活動においても人気が高かったそうです。

ある日、ある人が、政治家に質問します。「あなた様は、どんな秘訣でご自分の人格を高め、このように人々に人気を得られるのでしょうか。」彼は、何のためらいもなく、すぐ答えたそうです。「私は今まで、自分の背中を見ようとする心で生きて来ました。」「背中を見ようとする心って、それは何でしょうか。」「あなたは、ご自分の背中を見ようとして下さい。見えませんね。しかし他人の背中をよく見えます。そういう事です。」

私達は、いつも相手の背中ばかり見ているので、我慢が出来なくなってしまいます。しかし、自分の見えない背中を見ようとする時には、なによりも自分の反省点が直ぐに思い浮かびます。この話は多分誰かが、たとえ話として作った話だと思えます。ただ、「自分の背中を見ようとする心で生きて来た。」というこの表現は、これを考えた誰かが、感じられたところだったのでしょうか。

私達は二つの“はかり”を持って生きています。一つは自分を量る、“はかり”もう一つは相手を量る“はかり”です。いつも繰り返して申し上げている事ですが、相手を量る“はかり”はものすごく精密で、何ミリまでも量れます。しかし、自分を量る“はかり”は余裕満々なのです。明日量ってもいい、量らなくてもいい、とても便利な“はかり”を私達は持っています。

私達は、満足することが難しいのです。色々な関係についても、自分が置かれている今の状況に対しても、又抱えている事情にも、やっぱり満足が出来ないのです。しかし、この物語のように、自分の背中を見ようとするれば、そして、その様な生き方が出来れば、自分でも知らないうちに本物の余裕が、物事を正しく見る目が身に付くのではないのでしょうか。

今日の福音(マルコ 3・1-16)でも、何とかしてイエス様を倒そうとして、その現場まで足を運んだ者達がありました。そして、その人々の心を押し量られたイエス様は、『安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。』と、誰が聞いても反論の余地がない言葉をおっしゃったのです。そして片手の萎えた人に『手を伸ばしなさい』と言われたのです。イエス様を陥れようと狙った人々は、その場では何も言わず外へ出て、ヘロデ派とどのようにして殺そうかと論じ始めたとあります。面白いのは、ファリサイ派の人々とヘロデ派の人々は敵でした。同じ考え方を持たない者同士だったのです。しかし、悪い事をする時には、お互いに結束して協力し合い、滑らかに事に当たろうとするのが人間の歴史です。

さあ、何事も否定的な目で見ようとするれば、やっぱり自分が正しい方向、正しい考え方を、生じる事は出来ません。“はかり”の正確さも崩れてしまいます。ありのまま量ればいいのにそのようにしません。量ろうとしてもそれが出来なくなってしまいます。

私達が、今日の福音を通して考えてみるべき事は、否定的な心、否定的な目、その眼差しによって、相手を正しく見ることは絶対出来ない。そして、自分を量るその“はかり”は、もっと正確にしようする心が必要あると感じました。私も反省しています。

ありがとうございました。